

1 樹皮・材木採取



▲石斧での伐採は、繊維を叩き潰す様に斜め上下から切り込みを入れ、最後は押し倒すようにする。



▲樹皮剥ぎは時期が大切。写真はシラカバ（上段）とヒノキ（下段）の樹皮を剥ぐ作業。今回、シラカバの樹皮は剥く時期が遅く、苦戦を強いられた。

2 フジの根採取&加工



▲▶柱や垂木などを結ぶための紐としてフジの根を使用。根の柔らかい部分を土中から引き上げ、水に浸して柔らかくした繊維を裂き干して紐を作成。



3 骨組みをつくる



▲▶穴を40cm掘り、その中に先端が二股になるように切った柱を立て、くぼみに梁を載せる。作成したフジの根紐で結びつけ、梁の上に3本1組で作ったサスを2組載せて小屋組みを支える。



サスとは…棟木を支えるために材を合掌型に組んだもの。

4 垂木組み



▲▶柱1本に対して、2本の梁(クリ)をかける。その梁に複数の垂木(ヒノキ)をかけて、建物の形状を作り上げる。垂木を地面で受けている木はミズキ。縄文時代の道具で加工可能ということで採用された。



垂木とは…土壁などの下地となる材を支えるために、棟から軒にわたって設置する材。

5 桟(えつり)組み



垂木を縦に組んだあとは、地面と平行に少し細めのヒノキでえつりを載せて結びつける。えつりとは…茅葺屋根などの下地として、垂木の上に並べ敷く細い材。

6 屋根の樹皮葺&土葺



内側はシラカバの樹皮を使用。外側は出入口に近い側から、ヒノキ、サワラ、スギを使用して樹皮を2重にして下から重ね、土を載せて押さえる。



屋根の傾斜は30度程度だが、土が流れ落ちないように、樹皮のコツパを水平に置く補強土工法を採用した。

7 草の敷設



屋根の上部は、敷地内の野芝を剥いで載せて馴染ませている。傾斜が緩やかな部分はシート状の芝を張り、間に芝の種をまき、春以降の成長を見守ることとした。

8 土壁作り



藁のない時代の復元のため、麻ササを混ぜて粘土として使用。諏訪の厳冬を乗り越えるため、気密性を高めた。

9 内装づくり



竹を編み込むしがみ工法を取り入れ、土崩れを防ぎつつ、茶室のような雰囲気演出。敷物にはシカの皮を加工したものを使用。

10 完成



数々の行程を皆で協力して乗り越え、完成となった。

— 古過庵 — ができるまでの道のり

— 特集 —

縄文に想いを巡らせて“ここ”に集う 藤森式竪穴住居 — 古過庵 —



竪穴住居「古過庵」について

縄文時代の住居といえば、地面を掘りくぼめた「竪穴住居」である。

今回、制作にあたっては、茅野市米沢の棚畑遺跡で発掘調査された31号住居をモデルにして、建築家藤森昭信さんの設計により建築された。

大きさは、内径約4m、高さ約2m、深さ約80cmとなっており、南東の角に「出入口」、中心に「炉」、上部に「煙だし」を配置しているなど、竪穴住居の特徴が復元されている。

しかし、「古過庵」の魅力は復元住居部分だけに留まらない。

藤森さんによつて、「縄文人が生活していくには、ひいては「現代人である我々も含めた人間がここで生活していくには」という観点で追求されたこだわりが随所に見られる点も「古過庵」の魅力と言えるだろう。

遺跡の中には、用途についてはつきりとしたことが断定できない痕跡の存在や、発掘段階では分解されてしまつて残らない生き物の素材など、解釈の余地がある箇所が多くある。そういった箇所も「古過庵」では具現化され、見ることが出来る。

例えば、遺跡の出入口付近には、一對の小さな穴と浅い溝が残されているが、通常、この痕跡は階段施設だと想定されている。

しかし、寒さの厳しい諏訪地域では、縄文人も防寒対策のため、部屋の気密性を高める仕組みがあったのではないかと考え、「古過庵」では、風除室の痕跡だと解釈し、出入口に内扉、外扉と通路を配置することで、寒くない空間づくりを行った。また、シカの毛皮を敷物として利用したり、土葺にして保温性を高めたりするなど多くの工夫が施されている。このように、「古過庵」は、防寒機能を備えた「住める復元住居」となっており、藤森さんや企画の参加者らが縄文の生活に想いを巡らせて誕生した住居となった。



— 外扉と内扉の間に風除室—
厳冬を乗り切る方法として風除室があったと解釈し内扉を設置。

「藤森建築」として

当時の技術力の範囲を超えず、歴史的な解釈に基づいて復元を行つていくと同時に、当時の人々でも、「寒いと感じた」、「不便に感じた」などの種のリアリティを追求し、建築としての美しさも感じられる部分は藤森建築ならではの魅力と言える。

今回は、樹皮葺&土葺を採用しており、木材には、シラカバも使用されている。シラカバは防水性に優れているという特徴があるだけでなく、シラカバを使った建築には独特の美しさがあると先生は語っている。

そして、最上部には、アヤメ科のイチハツを植えられているのが見られるが、これは、ただデザインのために植えられているのではなく、屋根の強度を高める目的で茅葺屋根に植えていた伝統的な技法であり、建築的な意味がある。

このように、藤森先生の解釈に基づき、人々が暮らしていくために必要な機能を備えた建築として追求しつつも、美しい建築となるように美意識を保つこだわりが見られるところに「藤森建築」らしさを感じる事ができる。



— 小屋組の内側にシラカバの樹皮—
シラカバは、防水性や耐用年数に優れている特徴がある。

今回紹介した作業の他にも載せきれない細かな作業がたくさんあります。



Interview

— 縄文のまちとしての底力につなげたい —



木葉社
小池 耕太郎 さん

文化財の保護から活用への変化が求められている昨今、ある場所で復元住居に泊まるイベントを行っていることを知り、縄文のまちを標榜する茅野市に、「THE 縄文のまち」をアピールできるような体験拠点を作れたらと思い、この企画に携わりました。

藤森先生と制作に取り組む中で、先生の建築に対する姿勢や知識には改めて感銘を受けました。この「古過庵」では、考古学的なアプローチを守りながら、様々な伝統技術が応用され、藤森先生らしい建築的挑戦が行われています。

私は、藤森先生の解釈が再現可能になるようにサポートさせていただきながら、多くの人が実際に使用できて、学び・遊び倒せる場所にしたいという思いで制作に携わりました。みんなの本気が伝わる場所が出来たと思います。

ワークショップ形式の取り組みは、とても良かったと思っています。制作から携わってもらうことで、ここを大事に思ってくれる仲間ができました。この輪がもっともっと広がってほしいです。

これからは、ここが市内外の沢山の人に使われる体験の場として、防災力や生き残る力を縄文人から感じてほしいです。それが、縄文のまちとしての底力に繋がっていくんじゃないかと思っています。

実際に完成してみて、この住居であれば越冬が可能な建物になったと満足しました。通常の復元住居の場合、暮らす目的ではないため、風の吹きこみを防ぐことを考えていません。また、発掘しても土壁や動物の皮は分解されて残っていないことから使用しません。

しかし、縄文人になって考えると、彼らも動物の肉を食べれば皮を利用したと思いますし、防寒をするには土壁にしていたと思います。そういった様に、歴史の検証をしながらも、当時の人々の生活を考えて制作しました。

復元住居としてこだわったところは、竪穴式のため、穴を掘って制作し、防寒のため土葺にしたことです。私の建築という観点では、針葉樹の樹皮とシラカバの樹皮を使用していることです。シラカバは防水性に優れていますし、やはりとても美しいです。機能性と美意識の両方が共存した美しい建物になるように心がけました。そして、必ず縄文の技術で作れる範囲を超えないことを追求して制作しました。

今後は、多くの人に訪れてもらって、ここで食事をしたり、室内の煙たさを感じたりして、リアリティのある縄文を味わってほしいと思います。そして、この付近を一緒に訪れていただき、縄文のビーナスなどを一緒に見て縄文を感じてほしいです。

— リアリティのある縄文を感じてほしい —



建築家・建築史家
藤森 照信 さん

— 普段それぞれの生活を送っていても “ここ”に集まって、皆で作りあげる —

参加者の声



9月に1回と、11月に2回の計3回参加しました。

この企画を知ったきっかけは諏訪に旅行で来たときに、この企画のポスターを見たのがきっかけです。元々、藤森建築と縄文が好きだったので、そのタッグは参加するしかないと思いました。

実際に参加してみると、とても本格的な企画でびっくりしました。「協力すれば家つてつくれるんだね」って、参加した皆さんがおっしゃってたのが、すごいハートフルが体現された感じでとても居心地がよく、楽しかったです。

茅野についても移住を少し考えてしまうくらい豊かな環境だなと思いました。この企画に参加できたのは、本当に貴重な体験だと思っています。

わらしな
藁科 幸紀 さん

11月に入ってから計4回参加しました。

10月に、縄文のビーナスを焼くイベントに参加した際に、隣で行われているこの企画に興味を惹かれ参加したのがきっかけです。

元々、自然の中で過ごす生活は身についており、建物を建てるのが好きだったのも講じて、今回の土壁作りなどの作業時には、その経験が活きたと思います。

こういう企画に参加する方々は自然と同じ方向に意識が向いていると思います。流れに身を任せるように自分の身を置けば、もうその一部になる。そんな風に感じられるとても面白い体験ができました。

岡田 幸恵 さん 安彦 さん



担当者に聞く

— 交流の拠点と仲間を作りたい —

復元住居を中心に、火起こし、調理など衣食住にまつわる縄文時代のくらしを体験し、自然の一部として生きることを感じてもらえるような交流拠点を作りたいと思い、この竪穴住居の復元企画をスタートしました。

企画段階や制作中など、多くの課題がありましたが、関わってくださる方々、応援してくれる方々の協力で完成させることができたことをとてもうれしく思います。

ほぼ全員にとって初めての竪穴住居作りでしたが、この場に集う方々が、それぞれに今まで培ってきたスキルを伝授したり、リーダーシップを発揮して参加者をまとめたりと、全員が活かされるワークショップとなりました。そのおかげもあって、何度も参加してくださる方々が何人もいたことや、本来の自分になれると言っていたこと、参加する方々のすがすがしい表情を見られたことは、これから始まるこの場所での活動を進めていいと背中を押してもらえたようにも感じています。

また、完成後に制作に携わってくれた方々からいただいた感想からも、この場所や「古過庵」に思い入れを持って、気にかけてくれていることが伝わってきて、ワークショップを通じて多くの仲間ができたことをうれしく、そしてとてもありがたく思っています。

今後は、この拠点を活かして新しい体験事業を作っていく予定です。体験を通じて、人、自然、歴史、文化がつながる拠点到育てていきたいと考えています。



ちのDMO
田子 直美 さん

